CGILにおける諸潮流の対立・抗争（1990年代）

河野 槿

要旨

1970年代のイタリアにおける労使関係は最大限要求主義、紛争の継続、生産現場では労働者こそ主人公化という要求をはらんだ労使関係であった。その思惑としては、この労使関係は新しいものを生み出すこともなく、イタリア経済、したがってまた労働者の生活を混乱させた。80年秋のFIATにおける大紛争の労働側の敗北をもってこの労使関係は終焉する。新しい労使関係の枠組み形成は遅れる。90年代には国際共産主義体制が崩壊し、イタリア国内でも共産党が左翼民主党政団を改組、キリスト教民主党と社会党が解体、第二共和制への移行という大転換が進行するなかで、新しい労使関係の形成がすすむのである。イデオロギー的体質のつよいイタリアの左派では、旧傾向に固執する部分が力をもつつづけている。共産主義の旗をいまなおかげつづける左派少数派は70年代の運動に何の省察もくわわることなく、70年代とおなじ要求を提示して、CGILの政策に影響をあたえている。

キーワード

政労使間協定
コンチェルタツイオーネ
RSU-統一労働組合代表
左翼民主党
共産党再建党
Essere sindacato
Alternativa sindacale
Cara CGIL
コミュニニスト・エリア
目次

I はじめに - 90年代における全体状況

II 改良主義の強調

III 工場評議会からの挑戦

IV 91年第X II回大会前後の左派グループ

V 96年第X III回大会とその後の左派グループ
I はじめに

1980年秋のFIATにおける紛争の敗北を直接の契機として、70年代の紛争継続型労使関係は終焉した。労使関係の新しい枠組の形成は、国際共産主義体制の崩壊、共産党の改良主義政党への転換、DC、社会党の崩壊、小選挙区制を基礎とした第2共和国への移行などのプロセスと運動しつつ、進行した。だが、イデオロギー的傾向のつよいイタリアの左派には、改良主義への転換に反対する勢力もつよい。CGILの内部においてもこの勢力はいくつかのグループをつくって主流派に対抗した。この小稿は、1990年代においてCGILにいかなる潮流が存在し、どのような問題をめぐって対立したのか、さらに、左派のグループが70年代の労使関係への省察、その後の世界の展開への省察よりもいかに従来のイデオロギーに重点を置いておっているか、をトレースする。

80年代から90年代にかけての状況がどのようなものであったかについては「桜美林大学産業研究所年報」第20号（2002年3月）でもふれたが、さらに詳しく再説することからはじめる。

60年代末から70年代初頭にかけて反乱型のはげしい労使紛争が多くの工場でまきこみ、紛争継続型の労使関係が成立した。労働側は全員に同額の賃金引き上げなど平等を志向する人事システム、作業速度の監視、欠勤等にあわせた生産量の抑制などを主張した。「資本主義的労働組織」との対決の名のもと、ほぼ連日、ベルトコンベアーの脇で交渉がおこなわれた。この労使関係をになう企業内従業員代表組織は、同質的な従業員グループが、候補者名の記載のない白紙で選ぶ職場代表からなる工場評議会（Consiglio di fabbrica）である。

工場評議会は、1917年のロシア革命後、レーニン等がロシア革命に続くものとしてもっとも期待をかけていた国のひとつ、イタリアで、共産党の創設にうごくグラムシ等が、トリノの工場の内部委員会（commissione interna）を「ソヴェト」の萌芽としてソヴェトに転換させようとつとめた組織から名称をとっている。このことは、紛争継続を旗印とする運動が、最大限の要求、民主主義という名のもとにおける絶え間ない紛争の彼方に、どのような労使関係、どのような生産システムを描いていたかを理解させてくれる。工場評議会運動には、たっていいた労働者主義、つまり、生産の現場で労働者が主人であり、生産の速度、等を労働者が決定するのだからという思想とともに、「資本主義的労働組織」との対決というスローガンの彼方に共産主義的生産システムを抱懷する思想があったのである。最大限要求主義、作業速度・生産量の抑制、労働者の側によるこれらの条件の確定、このための紛争の激化と
継続から、よい仕事をなしとげることへの欲求、完遂した仕事への自己充足感、全体としての経済の拡大と発展などは生じえたのか？70年代におけるイタリアの経済はこれに完璧な否定の回答をあたえた。73年のオイルショックもくわわって消費者物価は

<table>
<thead>
<tr>
<th>年</th>
<th>百分比</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>73</td>
<td>10.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>74</td>
<td>19.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>75</td>
<td>17.2%</td>
</tr>
<tr>
<td>76</td>
<td>16.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>77</td>
<td>19.4%</td>
</tr>
<tr>
<td>78</td>
<td>12.4%</td>
</tr>
<tr>
<td>79</td>
<td>15.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>80</td>
<td>21.2%</td>
</tr>
<tr>
<td>81</td>
<td>19.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>82</td>
<td>16.4%</td>
</tr>
<tr>
<td>83</td>
<td>14.9%</td>
</tr>
<tr>
<td>84</td>
<td>10.6%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

と80年代なかばまで2桁の上昇をつづけ、イタリア経済はふかいクライシスのなかをゆれつづける。

もちろん、紛争継続の彼方に「理想の」王国にちかいものを抱懐している者にとって、このことはなんら問題ではない。むしろ当然のことである。労働者の主人公化が生産の停滞をもたらすような経済システムこそ否定されるべきだからである。

だがこのような理想王国的な考え方に、地球全体としてもさらに明確な回答があたえられたと、世界の圧倒的多数の人々は考える。ソ連や他の共産主義国の現実は、共産党の権力獲得→労働者階級の権力獲得→生産の現場と社会における労働者の主人公化→労働への喜びと充足感→生産の拡大と発展、というマルクス・レーニン主義の描いた理想図を完全に地に落としたのである。事実の推移は共産党の権力獲得、→共産党上層部への権力集中→書記長個人への権力の集中と独裁→大量の粛清と恐怖政治→労働の停滞→生産の停滞→社会の停滞、という回答を全世界に、あまりにも明確にしめたのである。

スターリンの独裁と恐怖政治がきわめて大きな打撃を共産党政権下の社会にあたえたあと、若干の軌道修正があったとはいえものの、それは「政治的民主主義の充実」とはおよそ無縁のものであって、共産党への権力集中→共産
党上層部、政治局メンバーへの権力集中→任期制を欠くことに由来する権力者の高齢化→超高齢者による権力のたらいまわし→政治の停滞→労働、生産、社会の停滞という図式に変わっただけである。(2)

もちろん抗争的動員、紛争継続がイタリアの工場をおおいつくしたわけではないし、紛争継続型労使関係に反対する労働者も、労働組合指導者もいた。だが労働組合運動の指導幹部の多数がこの熱病にノーの判定をくだし、70年代の紛争継続型労使関係を否定するのは、80年秋のFIATにおける35日間におよぶ大紛争で労働側が敗北をきっして以降のことである。

これ以後、まずスーパーインフレへの対策としてスカラ・モーピレの縮小が具体的な日程にのぼった。3労組はスライド・ポイントの上限をきめるという方針を慎重にうかだが、紛争の継続を最重要視する部分からこれへの抗議がおこる。この抗議にひきずられ、困難なクライシス対策に断固たる態度をうちだすことのできないCGILと、経済的クライシスを考えに入れざるをえないとするCISL,UILの政策の差が拡大していく。政府の側もねばりづよく交渉をつづけ、ついに、83年1月22日のスコッティ説定書により、スライド圧を抑える方向で指数の修正に到達する。83年8月に成立したクラクシ政府は84年4月17日の命令・法律によって、スカラ・モーピレのポイント引き上げに前もって上限を設定するという措置をとる。共産党とCGILはこれにはげしく反対し、この法律の一部を国民投票にかけて葬り去るため大キャンペーンを展開した。共産党とCGILは国民投票に敗れる。この過程でCGIL対CISL、UILの対立は鋭さをなし、Federazione-CGIL-CISL-UIL、さらに各産業レベルのFederazioneも解体する。

FIATの紛争における工場評議会運動の敗北にくわえて、このような3労組の対立の激化により、経営内の従業員代表は機能しなくなる。

C.デジャミーチが、トリロFIMのT.デアレッサンドリアとFIATの労務担当責任者のM.マーニャボスコにおこなったインタビューに、80年10月以降のFIATの状況がしみられている。「工場評議会は大きな被害をうけた。工場評議会がその役割をはたすのは困難であったし、いくつかのケースでは、工場の内部でなぜが生じているのかを知ることさえ困難であった。アクティヴな代表を欠く工場評議会は労働者との関係においても、その結果FIATとの関係においても機能しなかった。FIATは自己の選択を工場評議会と討議しようとしなかった。」(3)
もちろん工場により、地域により差はある。CGILの機関誌Nuova Rassegna sindacale 92年11月9日号に、ミラノのカーマナ・アール・ラヴォーロ書記長ゲッツィがそのことを書いている。「いくつかの評議会が定期的に更新されている。ミラノではそれが多数派なのだ。」だがしがゲッツィは全体の状況についてこうのぼる。「しかし、他方で、多くの工場でこの10年、投票が行われていないことは周知の事実である。労働の場に民主主義の規制のないことは耐えがたい。」(4)

この間に政治の枠組みも大きく転換をしている。
89年11月のベルリンの壁の崩壊を契機として国際共産主義体制が崩壊する。イタリア共産党はトリアッティイの時代から、56年のハンガリア民主化運動、68年のチェコの民主化運動へのソ連の軍事介入をはじめとしてソ連の専横な対応、反民主主義的な政策をつねにたしなめてきた。CGILにしても世界労連からは時期を追って距離をおく、西ヨーロッパ諸国の労働組合との交流を深める方向に軸を修正してきた。だが共産党も、CGILの多数派も共産主義のイデオロギーは慎重に保持しつづけてきた。88年6月、書記長に就任したオケットは断固たる決断と、それを実現する政治的能力を有する人物であった。共産党の全面改革構想をうちだす。90年第19回大会への各準備大会でオケットの動議は67.7%をえる。(5) 90年3月の全国大会で党の名称を変えという動議は66%の同意をえた。(6) オケットの動議が獲得した同意により、イタリア共産党の名称の変更がはじまり、91年1月の大会は共産党を解党して左翼民主党に改組することを決定する。オケットの提案に反対する保守派も当然のことながら存在する。オケットらの原案支持763にたいして、左派の修正案は365である（他に改良主義的傾向の修正案271）。(7) 共産党が左翼民主党に改組したあと91年5月、共産党再建党が設立され、後房雄氏の「大転換」は15〜20万人がこれに参加したと伝えている。(8)

左翼民主党と共産党再建党の対立はCGIL内にもストレートにもちこまれる。共産主義に固執する集団と対決する左翼民主党系の多数派グループは、共産主義集団のロジックに相対するためにそのロジックを理解したうえで、これに反論しようとする。このためCGIL内の左翼民主党系は共産党再建党の古色蒼然たるイデオロギーの世界にたえずひきこまれることを余儀なくされる。

国際共産主義体制の崩壊がイタリア国内にもたらした激震は共産党の改組
にとどまらなかった。イタリアにおいて共産党と対決してきた他の政党、とりわけ、政治権力の中心の位置をしめていたキリスト教民主党、社会党の、「権力に不可避的にともなう腐敗」を明るみにすることになる。

92年2月、「賄賂都市」ミラノが摘発され、93年1月、アンドレオッテイのマフィア疑惑の表面化、クラクシも汚職容疑の捜査通告をうけ、7月には社会党は解党する。94年1月にDCがPPIとCCDへ分裂する、というように、政党と政治プロセスに重大なクライシスが走る。

イタリアの政府は、小党の分立により1953年以降、連立政府という形をとってきた。連立政府は、不人気だが、実行を決断しなければならない政策ぶつめこむことができなかった。そのような場面に遭遇したばあい、いずれかの党の反対で連立が瓦解するのが常であった。この弱点を克服すべく、93年8月、小選挙区制が導入され、94年1月、上下両院の解散、小選挙区制のもとでの初の選挙がおこなわれる。政党の集中を促すという小選挙区制の意図はなお実現していな。分離、独立して政党の設立に走るイタリア人気質をつくづくと認識させられる。こうした気質が短期間で変わるはずもない。ただしそうした気質の中で新しい方式が模索されているのも周知の事実である。各政党が共通の首相候補を明確にして、「自由のための極」、「改善の極」、「イタリアのための協定」といった選挙連合のもとで闘う方式は、それまでの多数政党間の選挙→選挙後の政策協定→連立政府→必要だが不人気な政策の決断→いずれかの政党の反対→連立政府の崩壊、という方式とは相違するとみてよいだろう。

94年の選挙ではベルルスコーニがForza Italiaを結成、右派連合が勝利して、5月ベルルスコーニ内閣が成立した。90年5月の地方選挙で躍進をとげていた北部同盟もこの右派内閣に参加した。

北部同盟は、北部イタリアについて、中・南部イタリアから距離をおこうとする運動である。イタリア北部とイタリア南部の文化的差異は根深いものがある。南部への投資と同地域の工業化が南北の文化的差異を縮小してくるという前提のもと、労働組合も「南部開発」を旗印に書き込んできた。しかし南部への公的投資はマフィアなどの犯罪者集団の懐を肥やすケースが多く、建設された巨大施設も活用されることなく風雨にさらされて、経済効果を生まない。南部開発の「蓄積」は南北間の文化的差異の縮小にほとんど役立っていないのである。[9]「南部開発」というスローガンだけはいぜんとして政府を攻撃するさいの武器でありつづけている。このような状況が北部同盟
の支持基盤である。

共産党の左翼民主党への改組という大きな仕事をやってのけたオケットは92年総選挙敗北の責任をとって、11月、いさぎよく書記長を辞任。ダレーマがあとをつぐ。この書記長選挙は、ダレーマとヴェルトローニの競争選挙となり、249对174でダレーマが書記長の座についたのである。（10）共産党の伝統にはこのような競争選挙はない。

企業家として事業の急拡大に成功したベルルスコーニにはいろいろと陰もつきまとう。94年11月、ミラノ地検がベルルスコーニに捜査通告をし、12月、北部同盟が閣僚引き上げを決めたことにより、内閣は総辞職し、右派連合内閣は短命におわった。

デイーニ内閣があとをつぐ。左翼の側で共産党が社会民主主義政党に転換したのと対象をなすように、右翼の側でもファシズム運動の継承者とされてきたイタリア社会運動で健栄派が主導権を手にとり、95年2月、AN（Alleauza Nazionale = 国民同盟）へ改組されている。

96年4月の総選挙では、ブローディを首班候補にかついた「オリーブの木」連合が勝利、ブローディ内閣が成立する。政権交代が成ったのである。

98年2月、左翼民主党が左翼民主派にさらに改組し、10月、ダレーマ内閣が成立する。イタリアでは、教皇が、新しく政府首班についた者を謁見する慣わしがある。左翼民主派は元共産党員の内閣総理大臣を教皇が謁見するか否かを心配していた。国家の機関ではないにもかかわらず、イタリア社会の伝統と根に深く、かつ、ゆるぎなく根をおろし、大きな力で影響力をもっているこのシステムがダレーマ内閣にどのような態度を示すかである。教皇はダレーマを謁見した。ただし「オリーブの木」連合が多数をしめるには、共産党再建党の支持が必要である。この政府は、重要政策の決定にあたって共産党再建党に注文をつけられて立ち往生することが少なくなかった。

2001年月の総選挙では右派連合が勝利し、ふたたびベルルスコーニ内閣が成立している。

以上のような政治的・経済的変動と困難のなかで労使関係はどのように展開したのか？90年代の前半における労使関係の大きな動きは、RSU
（rappresentanze sindacali unitari—統一組合代表—）なる従業員代表制が再確立されたことと、政労使間協定、プロトコルがつぎつぎと締結され、そこに基礎をもつコンチェルタツイオーネのシステムが設定されたことである。

RSUが再確立されるまでには、80年秋以降低迷していた企業内従業員代表について、88年1月、FIM、FIOM、UILMの「工場評議会の全国規定」案の作成、89年の3ナショナル・センターによる「組合代表企業評議会」（Cars-Consiglio aziendale delle rappresentanze sindacali）の提案をへて、91年3月1日の3ナショナル・センター間の「統一組合代表設立についての協定」（Intesa quadro tra CGIL、CISL、UIL sulle relazioni industriali, rappresentanza sindacali unitari）へと進展する。ここでは名称から評議会（Consiglio）という言葉が消え、労働者憲章法の経営内組合代表（rappresentanze sindacali aziendali）を継承するような統一組合代表という言葉がとられている。ここまでは労働組合側からの提案である。

93年7月23日のプロトコルは「91年3月1日にCGIL、CISL、UILのあいだの枠組み合意によって規制される代表を、各事業所における経営内統一組合代表として承認する」とする。

これをうけて、93年12月30日の労使ナショナル・センター間の「RSUの設立にかんする協定」に到達するのである。RSUは、60年代末に工場評議会にとって替わられた内部委員会に近い。

企業内従業員代表制度の再確立とならんで90年1月25日、ConfindustriaとCGIL、CISL、UILあいだで、「労働コストと新しい労使関係システムのための協定」

92年7月31日、「所得政策、インフレとの闘い、労働コストについての政労使間合意」

93年7月23日、「政労使間プロトコル」

と協定が締結される。これらの協定、プロトコルは交渉システムを厳格にする。従来、産業別労働協約が締結され、賃金について一定の合意ができたあと、ほとんど時間をおかずにおなじ賃金引き上げの問題が企業交渉の俎上にのぼるように数多くみられ、経営側はこのことに不満をいだいていた。プロトコルはこうした交渉システムについて整理をした。プロトコルはまた政労の交渉システム＝コンチェルタツイオーネもあった。コンチェルタツイオーネのシステムは、雇用問題、社会保障、税システムなどについての政府との交渉、地方的な問題についての地方当局との交渉にウエイトをおこう
とするものである。もちろん、上記の問題について、経済全体との整合性等を尊重するか、または、それを考慮するよりも政府の施策との対抗関係に重点をおくか、立場はさまざまなにとりうる。

「政労使問プロトコル、Concertazione、統一組合代表」では、CISLの日刊機関紙Conquiste del lavoro（以下、Conquisteと略記する）に依拠しつつ、CISLが基本的にコンチェルタツイオーネの路線をとっていることを明らかにした。

この時期のCGIL書記長はトレンテインである。そして94年、トレンテインのあとをついだコッフェラーテイは、トレンテイン書記長下の書記局メンバーとして、一連の協定の合意に積極的にたずさわった。これらの協定、コンチェルタツイオーネをめぐるCGIL内の対立・抗争は以下でトレースする。左派からの協定、コンチェルタツイオーネへの攻撃は古色蒼然としたイデオロギー的性格をおびている。

II 改良主義の強調

第二次大戦後のイタリアの社会主義勢力は、ごくわずかな時期をのぞいて、社会党と社会民主党にわかれていた。社会党は社会民主主義政党であるよりも社会党であることを強調し、社会民主主義を強調する党はつねに小党であった。戦後第一回の総選挙である憲法制定議会選挙では、社会党の得票が共産党の得票を上回ったが、それ以降の選挙では共産党が左派における最大の党であった。武装レジスタンス闘争という極限の状況ではレーニンの主導したような民主主義性格が稀薄で軍事的性質を持った組織が最も適していた。共産党はレジスタンス闘争のなかで大きな権威、強大な組織力を蓄積した。社会党は共産党に対抗するため、つねに左の性格をもたねばならなかった。カトリック教会という強大な組織とイデオロギーに対抗するため、労働者運動全体として「あるべき姿」、闘いの目標に「理想像的姿を」をえがくことも必要であった。

CGILは社共系といわれたが、つねに圧倒的に共産党系が多数を占め、全国本部をはじめとしてほぼすべての傘下組織で書記長を共産党系が掌握し、副書記長が社会党系にあてられていた。書記局その他の構成においても社会党系は少数派であった。社会党系はUILで相対多数をしめ、CISL内にも散在し
た。日本の社会党とおなじく共同戦線的党であるため、しばしば極左に傾斜する部分をもかかえこんできた。

社会党系の統一労組を結成しようという合言葉はUILからCGILの社会党系にしばしばびびかけられたが、それが実現するきっかけはなかった。1983年から88年まで、長期政権としてクラクシ内閣が存続し、スカラ・モービレの縮小などの仕事をなしとげたことは、社会党系としての自覚を強めたかもしれない。

紛争継続型労使関係が破滅し、新しい労使関係をどのように再構築するかという模索がすすめられ、そしてゴルバチョフによってソ連社会の欠陥へのメスが大胆にあけられていくなか、1980年代末のNuova Rassegna sindacaleにはCGILの路線を改良主義にむけようという主張が一段と強く表明される。たとえば、P.スキッティーノ、G.カッツオーラ等は、CGIL内の改良主義派は結集し、改良主義の方向を強化するよう主張している。

1 CGILは継続するクライシスに揺り動かされている。
すでに生じ、いま成長している生産、社会、機構上の変化との意見の交換をうけ入れた職業、地域から噴出している生命力の自由な伸長を推進しなければならない。この何年か、図式的で廃れた階級的な考えにはもどりえない新しい主体的な感情が浮上している。これらは階級主義なる金数の尺度のもとにおかれるので拒否する新しい生命主義である。

2 CGILの資質は新しいものを恐れ、これに敵対する。
新しいものは全面的に、また即時的にポジティブではないが、変化にたいしてもつぺき態度は防衛的であったり、身震いするものであってはならない。そうでないとCGILは市民社会のダイナミックな鼓動から切り離された保守的な立場におちいってしまう。

3 CGILは改良主義の枠組みをもち、イタリアが通過している変化のプロセスに、主役のひとりを演じるプログラムをもつべきである。労働の世界では深い文化的変化が進行中である。改良主義的労働組合は、労働者の職業上の利益、遺産をもち、批判的立場をもちつつも、変化と現代化のプロセスに参加すべきである。職業的主体、相違と個別性を重視し、集団主義と平等主義から離れるべきである。

4 EURの転換から今日まで、労働組合運動と政治における改良主義の確認を妨害してきた反対派の要求至上主義シンドロームを克服しなければならない。労働組合の左派はまたまた新しい純粋さをかくとくしようと模索し
ている。存在しない社会、抽象的でイデオロギー的な社会の描写、日々の経験の検証をさける社会を描写することに固執しているのである。

5 少数派は重大な柱株である。少数派とのあいだに妥協を求めようとすれば、それは偽善的で、同質的な一致をもとめてることになり、CGILの混乱状態を浮かび上がらせる。少数派が、幹部グループに不安定をひきおこすのを拒否せねばならない。

6 利害のコンフリクトは消失していない。しかし、それは企業の社会的重要性という理念と関係をもつつつ展開されていることを認めなければ成らない。発達した世界は矛盾に満ち、新旧の不正に満ち、ドラマティックな突発事件に満ちている。しかしこう、ポジティブな発酵と根本的な革新に満ちた経済と生産が再興しつつある。

7 社会主義の経験は、何十年もかかって、経済的自由なしに政治的自由は存在しないことを検証した。(12)

以上は社会党系の主張であるが、CGILの少数派、左翼民主党（Pdsのちに左翼民主派→Ds）系も社会民主主義、改良主義の路線にたっている。かつての左派の闘将、FIOM書記長をへてCGIL書記長に就任しているPds系のトレントインの集会における報告について、CISLの機関紙Conquisteは、こうのべている。トレントインはフレキシビリティ政策の必要、たとえば全生涯をとおしてフルタイム就業のモデルのみを追及する考え方を克服することが必要だ、など論議の支柱を込じるし前方へ移動させた。また構造上、財政上の両立を可能にするという問題を排除していない、公の借金を再吸収するための貢献としての集団的な貯蓄のさまざまな形態について交渉することを排除しない、歳35労働時間については社会的必要にくわえて経済的必要にも言及している、経済民主主義というみとおしと競争力と両立しやすい構造転換を追求する、などとのべている。(13) 公の借金を再吸収するための貢献としての集団的な貯蓄のさまざまな形態とは、勤労者の賃金引き上げの一部を投資のための基金として貯蓄にむけるという問題である。物価の抑制と投資の拡大をめざす政策として早くからCISLが提起し、CGILが反対してきたものである。

トレントインは90年、92年、93年の一連の労使間協定、プロトコルの署名に合意した。トレントインのあとをついだコスペラーティも、トレントイン下の書記局メンバーとして、これらの協定、プロトコル合意の過程でCGIL側の中心的役割をはたしている。Conquisteは、「70％の人々がコーヒ

42 経営政策論集
ラーテイを優れた交渉者、穏健派と考えている」、そして「CGILは強力な改良主義的多数を有している」とするのである。

もちろんPds系多数派の改良主義的傾向への進行はそう単純ではなく、じつぎりである。

92年のConquesteは、「CGILの集会は、最も強硬な代表に、いまなおゼネストについて語る代表に、92年7月31日の協定を裏切りだと語る代表に、温かい同意の拍手を送っている」 とし、93年3月2日の同紙は上でのべたように「CGILは強力な改良主義的多数を有している」としたすぐそのあとで、「しかしながら石のような確信者が非難すると、魔法にかかった塩の像のように、指導力は矮小化される」 と指摘している。第Ⅲ章でややくわしくのべる工場評議会を擁護する勢力からの挑戦への対応もじつぎりの例そのものである。さらに、94年に右派連合の政府が成立したときの対応もいかにも古い考え方をしている。政権交代システム確立の一プロセスとしての選挙で選ばれた右派連合政権にたいする声明は、「レジスタンス50年を迎える年に、イタリアはヨーロッパで唯一のケースとして極右が新しい政府を形成する候補となっている。」「選挙期間中、右派連合に要求系のオルタナティブを提案したCGILは中立と期待の態度をとることはできない」 とする。ヨーロッパ共同体が進行している中で、「レジスタンス50年」という言葉にもたせようとしている内容は現実性をもたない。

組織内に極左をかかえるCGIL多数派指導者たちの言葉はしばしば難解であるし、うえにのべたようなじつぎりがあるというのはもので、多数派の基本方針は改良主義である。書記長コッフェラーティ、書記G.カーサーデイオらは政労使交渉、コンチェルタツィオーネの路線を継続している。コンチェルタツィオーネは国のシステムの方向と安定の、おそらく唯一の要員であった。雇用の問題は経済の成長なしに解決できない、政治主義的、中傷的な文章は失業問題の解決をめざす新しい道をみつけるのに役に立たない、賃金と、国の全体的・経済的ダイナミズムとの両立する回答をみつけねばならない、という発言はこのことをしめしている。

そのうえCGIL多数派のパックにいる左翼民主党（のちに左翼民主派と改称）は96年の総選挙のあと、オリーブの連合のもとで政府の中心勢力となり、98年には書記長のダレマが首相に就任する。改良主義を進める以外に
道はない。オリーヴの木連合は2001年の総選挙で右派連合に政権をひきわたすが、2003年夏、左翼民主派書記ファッシーノは「私は、左翼民主派に改良主義の党を建設することを求める。われわれはイタリアの改良主義の共通の家を建設するための作業場の開放が可能であるか否かを証明しよう」と、改良主義の路線をさらに明確にしている。

労働組合が政党よりも保守的であるのこそ当然である。労働組合が革新的でありうるのは、労働者の諸権利がほとんど認められていない、労働条件がきわめて劣悪なばあいである。

### Ⅲ 工場評議会からの挑戦

工場評議会を基礎にした紛争継続型の路線が空想的なイデオロギーにもとづいており、勤労者の未来、生産システム、経済システムの未来を切り開くことができないことは、70年代のイタリアの現実からも、また、ソ連をはじめとする共産主義国史の停滞と、瓦解からも明瞭なことはすでにのべた。しかし、イデオロギーが思考傾向のつよいイタリアの左派には、なお従来の思考体質を変更しようとしない部分が、他の諸国に比較して、大きな比重をもって残存、継続した。共産党の左翼民主党への改組にあたって共産党再建党結成の動きについて、後・房雄氏もこうのべている。 「ガラヴィーニは結語で新しい党が共産党を名乗ることを提案して熱狂的な拍手を呼び起こした。イタリアにおける共産主義の驚くべき深い根付きかけ、今なお続く深い愛着を証明してあまりある動向といわばならないだろう。」

工場評議会の存続への固執もつよかっ。このことは、工場評議会の多くが活動を停滞させ、更新がどこにあるようになっていた80年代末の1988年、FIM,FIOM,UILMが発表した工場内従業員代表の全国規定の名称が、内容はともかく、「工場評議会の全国規定（Il regolamento nazionale sui consigli di fabbrica）」となっていたことに、その一端が示されている。

92年10月末、工場評議会に固執する部分がミラノで動きをみせた。10月29日、化学労働組合が、アマート内閣の政策に反対し、労働組合の民主主義を要求する示威集会を招集、工場評議会の調整委員会がこれに参加した。そしてミラノのカーメラ・デル・ラヴォーロもこれを積極的に行支持したのである。ミラノでは50,000人が参加、Assolommbardo（ミラノの工業家組織）
建物の前と、ドゥーモ広場の2カ所で集会がおこなわれた。
Maseratiの工場評議会代表のE・コロンボは2つの集会で「われわれは組織された運動ではないし、労働組合を空洞化するものでもない。ストライキは従従に反対して宣言された」と演説した。
統一評議会運動の推進者のひとりであるミラノのSiemens Tlcの工場評議会代表G・ボッテイは「10月29日のストライキは全部門のストライキではなかった。しかしアマート政府の政策を抗議するための全般化された動員であった。われわれはナショナルセンターのトップに替わるつもりはない、労働組合の内部でわれわれの不同意を表明することをのぞんでいる」とのべた。示威集会後、工場評議会の調整委員会はCGIL、CISL、UILに面会をもとめ、提案された内容を評価し、受け入れること、統一的な論拠、大いなる参加を、労働組合の遺産として評価し、受け入れることを要求した。(23)
うえにのべたように、ミラノのカーメラ・デル・ラヴォーロはこの動員に積極的にかかわった。ミラノのカーマラ・デル・ラヴォーロといえば、トリノとならんで、イタリアの労働組合においてはとくべつに重要な重みと意味をもっている。書記長ゲッティはつぎの諸点を強調する。
政府との意見交換はなお進行中である。最初にえられた結果は重要である。しかしこの結果とわれわれの要求のあいだはなお遠い。首尾一貫し、眼にみえるイニシアティブをもって交渉を支えなければならない。化学労働組合の動員と160の工場評議会の動員はこの文脈のなかに位置している。ミラノのカーマラ・デル・ラヴォーロは困難な内部論議のあと、工場評議会の統一的な動員をうけいれた。これは、この3ヶ月になされ、組織され、進められてきたことと、完全に首尾一貫している。この3ヶ月に4,000回の勤労者との集会、工場評議会のつよい主導で市民の闘いが5回にわたっておこなわれた。(24)
R.アゴスタイーニも工場評議会の意義を強調する。
工場評議会が招集した示威集会に多くの労働者と市民が参加したことは変化の兆しのひとつである。これを認めなき者は近視眼である。示威集会に参加した多くの人は、工場評議会を誕生させ、70年代の労働組合の季節に参加した人々であり、84年のスカーラモービレのカットへの抗議に参加した人々であろう。ある人々は、だから、新しいことは何もない、と言う。だがそうではない。工場評議会の運動は92年秋、ミラノに再生し、政府とナショナル・センターに対する広い抗議のスポーツクスマンとなった。いま、ナショナル・センター傘下の労働組合は、労働組合民主主義の問題を解決していないと非
難されている。工場評議会は労働組合民主主義の理念を思い起こさせる。

CGILはこの運動に肯定的態度をとる。

工場評議会調整委員会、ミラノのカーメラ・デル・ラヴォーロのこうした
動員と、これにたいしてCGILがとった態度にたいして、CISL、UILははげ
しく抗議する。

CISLは強調する。
「92年10月26日の午後おそく、夕方の稲妻のようなトレンティーンの声明
は、ミラノのいくつかの工場評議会が、統一的な協定の外で、一方的に提唱
したストライキに保証をあたえた。昨年に予定されていた過記日の統一会合
を無効にし、また3劳組が政府にたいしてここまで展開してきた統一的活動
を再考慮の対象にしてしまった。」

10月30日、CISLは、いくつかのミラノの工場の組織が一方的に決定した
ストライキにCGILが葉書をあたえたことについて、CGILに説明を要求、R.
モレーゼも、CGILのモンテカティーニにおける集会でのトレンティーンの確認
を支持する一方で、昨日Cobas、今日自主招集者を追い払すのは明らかな
矛盾だとした。

工場評議会の側は、93年2月27日にもローマで示威集会を自主招集し、
CGILの数多くの幹部たちは、これに直接の支持をあたえた。これをめぐって
もCGILとCISL、UILのあいだではげしい応騒がなされる。

CISLはこう非難する。工場評議会の側は、労働者憲章法の第19条の廃止
をめざすレフェレンダムを提案すべき署名を集める準備をしており、また、労
働組合の組織、役割、任務を規制する法律を提案した（第19条は、経営外組
合代表の構成について定めるもので、「以下の範囲で、労働者の提案に基づき
経営外組合代表が構成される。a全国レベルにおいて最も代表的な総連合に
加盟している組合。b右の総連合に加入はしていないが、生産単位に適用さ
れる全国または県協約の署名者である組合」という規定はは3ナショナル・
センター系に有利なものである）。この何両間かにCISLとUILの代表は多く
の工場評議会から離れた。CGILもよくしっているように、われわれは、RSU
に民主的で、確実な規制をあたえるために努力しているところなのだ。
CGILにおける諸潮流の対立・抗争（1990年代）

CGILの態度も一面でははっきりしていた。CGILは、工場評議会がローマに1993年2月27日に招集する示威集会の外にいる、と宣言、全国書記ベルテイノッテイが提出した、参加、不参加を投票により公式決定すべきだとする決議を圧倒的多数で否決した。だが、ミラノのカーメラ・デル・ラヴォーロ書記長ゲッツイ、全国書記A.グランデイをふくむ多くの幹部は公然と示威集会を支持した。そして2月27日の示威集会にPds系第一級幹部のほぼ全員がくわわったのである。この集会をめぐっては左翼民主党と共産党再建派のあいだで熾烈な争いがあり、CGILはこの政党間の争いから離れていることはできなかったのである。

CISLはさらにのべる。

示威集会は労働者憲章法代19条の廃止を問うレファレンダムをスローガンにかせ、Confederazione労働組合解体の試みに貢献している。集会は紛争激発主義へのノスタルジア、幻想と無関心を生み出す反乱主義へのノスタルジアであって、統一のみとうしを混濁させる。CGILの路線は、一方で、CISL、UILとの統一の意志を確認しているようにみえるが、他方で、示威集会招集者たちのがべる正反対の意志を確認しているようにもみえる。2月27日の集会にたいするCGILのあいまいさを克服する裁量の方法は、ただちに、そこから手をひくことである。

93年のプロトコル、94年のConfederazione間協定によって統一労働組合代表が確認されたためもあって、工場評議会を強調するグループの動きはその後表面化していないが、その労働者主義、最大限要求主義、紛争至上主義の傾向はCGIL内の左派グループに継承される。

IV 91年第X II回大会前後の左派グループ

88年6月、共産党書記長オケッタが共産党の全面改革構想をうちだしたことにともなって、共産党の内部で激戦的な抗争が生じた。この抗争はストレートにCGILに移入される。88年11月28日のConquisteはこの状況をつぎのようにのべている。

CGILのさいきんの執行委員会では、予測できないような墜落の起源となる対立が生じた。すべてのレベルのコミュニリスト系幹部グループの内部におい
で、先例のない透明さをもって、そして、しばしば過度なまでの荒々しさをもって政治闘争がおこなわれている。異なった政治路線、さまざまな戦略的オプション、さまざまな世界観の存在、が政治闘争の基礎である。この例年かの事実によって歴史のごみ捨て場に引き渡されるはずであった大きな欺瞞がふたたび花開こうとしている。

すでにのべたように、90年3月の第19回大会で共産党を全面的に改組するという動議は66%をかくとくした。91年の大会で改組派はさらに多くなるが、しかし、共産主義のイデオロギーに固執する部分はけっして少なくない。共産党内部における政治抗争、それをストレートに移入したCGIL内の内部抗争は91年の共産党大会、同年のCGILの大会へむけて激化する。

90年6月、CGILの左派反対派は声明文を発表する。この声明文に名を連ねたメンバーがCGILの各機関にどのように散らばっているかをみておこう。

<table>
<thead>
<tr>
<th>F. ベルテイノッテイ</th>
<th>CGIL 全国書記</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A. ブッファルデイ</td>
<td>Flai 全国書記</td>
</tr>
<tr>
<td>G. クレマスキ</td>
<td>FIOM 全国書記</td>
</tr>
<tr>
<td>P. フランコ</td>
<td>FIOM 全国書記</td>
</tr>
<tr>
<td>S. セメラーロ</td>
<td>CGIL 学校 全国書記</td>
</tr>
<tr>
<td>M. アゴステイネッリ</td>
<td>ロンバルデイア州書記</td>
</tr>
<tr>
<td>G. ベルトーロ</td>
<td>アレッサンドリア Cdl書記</td>
</tr>
<tr>
<td>G. ボン</td>
<td>ゴリツイーラ Cdl書記</td>
</tr>
<tr>
<td>S. ボナドンナ</td>
<td>全国CGIL</td>
</tr>
<tr>
<td>L. カステルデイ</td>
<td>アレッサンドリア Cdl書記</td>
</tr>
<tr>
<td>C. コレッット</td>
<td>カステッラマーレデイスタビア Cdl書記</td>
</tr>
<tr>
<td>F. ダニーニ</td>
<td>全国CGIL</td>
</tr>
<tr>
<td>G. デサンテイス</td>
<td>パレルモ Fp 書記</td>
</tr>
<tr>
<td>G. ディィオリオ</td>
<td>カンパーニアCGIL</td>
</tr>
<tr>
<td>M. ファロッパ</td>
<td>クーニオ Cdl 書記</td>
</tr>
<tr>
<td>F. フェッラーラ</td>
<td>ポミリアーノダルコFIOM書記</td>
</tr>
<tr>
<td>F. フィリッピ</td>
<td>Filtea トスカーナ州書記</td>
</tr>
<tr>
<td>M. ファガッツァ</td>
<td>Spi ロンバルデイア州書記</td>
</tr>
<tr>
<td>S. ガレッツィ</td>
<td>&quot;Progetto sviluppo&quot; 副編集長</td>
</tr>
<tr>
<td>G. ガッリ</td>
<td>ロンバルデイア州書記</td>
</tr>
</tbody>
</table>
署名者はCGILの全国レベルから各地の指導者にひろがっている。
Essere sindacato（労働組合であること）と称した左派反対派の方向はIIでみた改良主義の方向と真っ向から対立するものである。いくつかの点をみておこう。

1 工場内代表組織、つまり、労働者と労働組合のあいだの関係について統一的な規定がない。③③

これは工場評議会の崩壊後、新しい従業員代表システムが再確立されていない状況からして、当然の強調である。

2 重要な産業部門での協約改定において、労働者のとの協議がおこなわれていない。労働者は参加の権利を欠いている。労働の世界におけるさまざまな利害は、分節化された調整無しに、幹部グループによって調整されるものではない。③④

この主張は一見正当で、批判の余地がないようにみえるが、下部の主導権
→全員が自由に、望むだけ発言する権利を持つ集会→何時間もつづく長い長い論義→一般労働者の退出、→政治的議論、政治闘争そのものを生きがいとする少数のレディカルだけの会合への縮小化、→この少数グループによる結論、方針の決定、という70年代の経験についての省察を欠いている。90年代における例をひとつだけあげよう。93年7月、ジェノヴァの港湾労働者は集会において、キーニーで署名されたプロトコルを拒否した。共産党再建派がつよい影響力をもつところで、CGILの少数派の中心のひとりD.オリー・ヴァが主導した集会である。挙手による投票の結果は、支持する者11、反対する者90、棄権8である。この集会を「労働者との協議」として評価できるのか？左派グループはそうするだろう。だが実態はまったくそうではないのである。集会への出席者を考慮に入れればそのことは明らかである。集会への出席者は従業員1,000人のうちわずか100人ほどなのである。このような集会は、70年代の紛争至上主義、集会至上主義のなかで数かぎりなくみられましたことである。

3 革新された資本主義の大企業は人間労働が重要であることを再発見し、労働者に「知的労働」を要求している。しかし同時に、批判的、能力、個人の自立性を放棄することを条件にしている。企業には、組織された労働者の自立性を受け入れる用意はない。

改良派の主張にあったような「社会主義の経験は、経済的自由無しに政治的自由は存在しないことを検証した」ことは省察、ネガティブな側面を取りながらも企業のもの社会的重要性についての省察を欠き、イデオロギーにもとづく旧態依然たる企業性悪説である。

4 労働組織へのコントロールの再確立、企業の固有の条件への自主管理。

70年代に工場評議会をとおして、労働者側による労働組織へのコントロールが進展した。しかしこのコントロールが「ひたすら仕事をしない」、「ひたすら仕事をふやさない」ことだけに関心を集中し、仕事の価値の確認、労働をとおしての自己充足感、労働をとおしての自己実現、生産の発展、経済の発展に何の貢献もなく、この方向への歩みを抑えるだけに終わったことに何の省察もくわえていない。70年代への単純な回帰の願望である。少数派の批判には、労働の世界で進行している文化的、質的変化についての省察もな
い。社会の成熟にしたがって、勤労者は、個々の特性、意志、生き方、労働に自己充足感を求める方向に歩んでいることも思いをおよぼしていない。

90年6月の左派の声明文に名をつらわぬグループは一枚岩ではない。

FIOM書記をしていたG.クレマスキーは言う。少数派はひとつの文化に鼓舞された一枚岩の集団ではない。労働条件を中心におく労働組合の民主主義と再建をめぐる闘いに合流した多くの潮流からなるのだ。（38）

全国FIOMのS.ペトルッチも、Essere sindacatoは自らを組織された集団とし、新しいcomponenteを設立することを意味するのか？（コンポネンテ、構成員という意味、労働組合のなかの派閥、潮流をさすものとしてはcorrenteがつかわれていたが、派閥への批判をうけてcomponenteがつかわれるようになり、最近ではarea－エリアという言葉がつかわれている。ごく一般的にはグループの拘束力から構成メンバーの自立性への傾向を反映していると言えるかもしれない）と問う。ペトルッチはこの方向に反対であって、意見の交換は具体的な選択に基づいておこなわれるべきである。問題をめぐってその都度、その都度新しい、異なった多数派が形成されるべきである、とすら。（39）（この主張はしばしば聞かれるが、組織内における人間の集団行動にみられる特性には合致しない空想的な要望ではないか。）

時間的にややのちのことであるが、Essere sindacatoに名をつらわしていたヴェローナのカーメラ・デル・ラヴォーロ書記I.ベドレッティが97年4月にのべていることをみてても、多数派に一定の批判をもつつつも、けっして他のメンバーとおなじ立場にあるとはおもえない。ベドレッティはつぎのように主張する。

この何年かの経済的・財政のクライシスに直面したイタリア労働組合の行動をどうして忘れられるか？93年7月の協定は、所得の抑制、雇用労働の犠牲という政策を確定し、国の再生を業務するのを可能にした。だが、この協定による労働組合組織の責任のおかげで、フレキシビリティ、生産性、購入力という結節点に対処した。全労倶の権利と最小賃金の擁護を全国協約のにやだね、労働時間、労働組織の生産性・企業の収益性にむすびついた賃金、生産の要請にむすびついた労働時間のフレキシビリティを企業交渉地域の交渉にゆだねる、という交渉システムができあがった。公的保障システムに打撃をあたえようとするベルルスコーニ政府との衝突をさいしょに支持した者のなかにCGILはいなかったのか？その時左派はどこにいたのか？さいきんの協定は賃金のフレキシビリティを挿入したが、しかしあた若者にとって新

Vol.3 No.1（2003）
しい機会を挿入した。労働の不安定化、低い賃金、闇労働、最小の権利、強制、EU外からの移入労働者のために闊ってきた。大学生のための訓練実習コースを導入した。われわれは、規制されたフレキシビリティ、労働者の最小の権利を尊重するフレキシビリティに賛成である。

ミラノの東に位置する工業都市ブレッシアには、CGILにおいても、CISLにおいても、左派が主導権を争っている伝統がある。CGILのカーマ・デル・ラヴォーロにおいては労働者主義の傾向がつよい。書記長P.ベドーも、「Essere sindacatoがcomponenteのような振る舞いをするなら、私の立場を修正する」とし、correnteのいっさいの拘束からの絶対的自由、帰属に由来するいっさいの義務の消滅を求める。(41)

ところでお1991年1月の大会で共産党は左翼民主党に改組、これにたいし共産主義イデオロギーに固執する部分は5月、共産党再建党に結集する。共産党再建党に結集した部分がつよい活動力と凝集力を有していることを想像するのはそんなに難しくない。Essere sindacatoの各グループのうち共産党再建党の力が増大していく。とくにベルテイノッテイが共産党再建党にうつることによって、Essere sindacatoがCGIL内のコミュニストの潮流になることへの他グループの懸念もいっそうつよまるのである。共産党再建党の内部にも、コミュニスト潮流の形成を望まない部分もある。

たとえば、プロレタリア民主主義をとおって共産党再建党にはいるG.パッタがそうである。パッタは自立的で、階級的なCGILをのぞむ。しかしパッタは古典的な意味でのcomponenteを設立することには賛成しない。政治的指導者と政治的選択を基礎として、アプリオリに判断がなされる組織をのぞまない、とする。(42)

ブレッシアのグループからのEssere sindacatoへの批判もつよまる。共産党再建党の設立から、したがってさきに言及したベドーの発言から2年ほど後の1993年11月にベドーらは「Essere sindacatoはどこでまちがえたか？」を発表している。もちろんベドーはCGIL多数派にきびしい。繰り返しになるので、ブレッシアの組合指導者たちの多数派への批判は政局の協定に関連するところだけにしかる。

91年6月の第X II回大会後の出来事は、この大会に由来する政治路線が不適切であることを明らかにした。労働市場が分断され、スカーラモービレも終焉した。賃金の抑制、労働時間・税・賃金などの基本的問題についての自立
した戦略が放棄された。雇用・産業政策・発展の質など、重要なテーマについて意志とイニシアティブが空白化している。社会的細分化が進行し、連帯が崩壊している。労働者との関係が退行している。統一に重点がおかれて、民主主義はその従属変数になっている。少数グループによる労働組合の管理が定着している。政労使間協定はその破壊的な出口である。

だがベドーは多数派批判への返す刀でEssere sindacatoを批判する。Essere sindacatoの誕生と新しい内容の対話は新しい積極面である。しかしそれも、潮流化と官僚主義的慣行の克服、CGILの改良にはつながっていな
い。Essere sindacatoは起源となっていた特徴を変容させた。帰属へのロジックが考慮されすぎている。グループに結晶化した各エリア(Essere sindacatoはそのひとつである)がおなじ傾向に傾斜し、ボストの分割が政策路線の論議よりも優先している。

ここには、共産党再建党の動きの活発化と、それにあわせてEssere sindacatoがCGIL内の潮流として行動をとめていることへの批判がみられる。プレッシアのグループは政党とのきざなをもたないとする労働者主義的傾向を継続しようとしている。

「プレッシアでは潮流への横滑りはさけられた。立場の複数性は豊かさである。論議はつねに自由で、あらかじめ形成された隊列と各立場の守りの態勢を阻止した。」(43)

少数派の批判がつづいているが、CGIL多数派とCISL、UILは政労使間の交渉をすすめ、すでにのべたように、
92年7月31日「所得政策、インフレとの闘い、労働コストについての政労使間合意」、
93年7月23日「政労使間ブロックル」
を締結する。

少数派はこの点についても批判をつよめる。うえに言及したベドーもそうであった。92年1月のM.サイの論文はとくにこの点に焦点をあわせている。サイは、91年12月10日のブロックルの署名にあたって労働者のあいだでの論議がなかったことを強調する。書記局は、各レベルの書記長への情報伝達の会合で、ブロックルの案を論議しようとした。一グループがこれを強引としたが、指導委員会の招集を要求した、ブロックルに署名するという決定は、政府とのフォーマルな亀裂を避けるという政治的選択であった。この選択は間違
いであった。④④

P.ソルディーニもこの点についてひょくにきびしい。

地域協定においては10人の人間が、労働条件、賃金、都市計画、環境、会計、予算に関する協定と法律の規定をきている。どんな委託によってか？関係する主体の参加、コントロール、検証の手段はどうなっている？このメカニズムのなかで産業別交渉の役割が陰におかれ、RSUの役割がゼロになり、失業者も代表をもてない。ラティーナ県で地域協定が署名されたあと、レフェレンдум、協議、代表の集会もなかった。また投資額、労働ポストが数量化されている協定には、新しい産業政策、発展モデルについての考察の跡がない。これでは、何百、何千という新しい労働ポストが実現されたとしても、統治されない労働市場のトレンジ、こわれやすく、歪められた経済にかんたんに吸収されてしまう。④⑤

CGIL内の共産党再建派への他の少数派からの批判、政労使交渉に重点をおく主流派への批判をみてきた。CISLは、CGIL内の多数派、少数派の抗争が、CGILを左へ動かすことを懸念し、こうのべている。

④①年の全国大会からできた軸がクライシスにあることに疑いはない。左翼民主圏のエリアと改良派社会主義者のエリアによる多数派はさいきん苦痛と困難にあえっている。④⑥これには、社会党からCGIL副書記長デル・トゥルコ（社会党系）に資金がわたされていた問題が表面化し、Essere sindacatoから調査委員会設置の要求がだされるなどの揺さぶりをうけていることもある。これにたいし、Essere sindacatoはアッシジの平和集会にCGILの代表にならんで代表を送るなど活動を拡大している。

また下部の集会で、左派が影響力をもち、3労組の路線を否定する傾向を心配している。

トレヴィーソちかくのZanessi工場の勤労者集会でCISL書記モレーゼが労働コストについて話した。2,000人の従業員のうち700人が参加したが、しかし雰囲気は必ずしも友好的ではない。共産党再建党、Essere sindacatoの宣伝したノーが根付いている、という。トレントンが参加したセストリボネッテのFincantieriの集会でもノーが支配的であった。CGILは左派の勢いを感じ、CISL、UILとの統一的な関係を苦痛に感じている。CGILの内部調整をやや左へ移動させる危険がある。④⑦
V 96年大会とその前後の左派

96年6月の大会前後の潮流間の争いにうつろう。
91年の大会において左派対左派から一本の文書が発表されたことはすでに
のべた。左派対左派の各グループはEssere sindacatoにまとまっていた。だ
が政党のレベルで左翼民主党と共産党再建党の対立が激化している。共産主
義イデオロギーから社会民主主義へ脱皮しようとする勢力と共産主義のイデ
オロギーに団結する勢力のあいだの対立である。それはCGIL内にストレー
トにもちこまれる。労働組合に政党間の対立をもむむことを行ったとす
るグループも当然存在する。

96年6月の大会にむけて、95年12月のCGIL指導委員会には2本の大会文
書が提出された。第一の文書は105名の署名をえ、第二の文書は10名の署名
をえている。さらに第三の文書の提出も通告された。そして96年6月の
大会には、多数派の文書、Alternativa sindacale 1の文書、Alternativa sin-
dacale 2の文書、Cara CGILの文書が提出された。採決の結果をききにの
べれば、多数派の文書は82%を、Alternativa sindacale 1の文書は12%を、Al-
ternativa sindacale 2の文書は5%を、Cara CGILの文書は1%を、えた。

多数派の文書も90年代に進行している状況にたいするきびしい文言でみち
ている。それはどの社会もがつぴひずみは繋をよびかけるものである。

制限のない成長という理念はクライシスにおちっている。生産性上昇の
一部を賃金と雇用というかたちで労働にうつすべきである。完全雇用の道を
とるために、市場の自発的なダイナミズムだけにまかせておくことはできな
い。労働にたいして競争モデルを確認するべく、進行中の重要な再興を管理
しようとする諸勢力と闘うことが必要である。企業の利潤の絶対化、競争と
リスクについて絶対化されたイデオロギーは、将来への不安、排除されるこ
とへの、縁辺化の領域へおちいることへの恐れを拡大している。

ただし、これらは最大限要求主義、紛争至上主義とは相違する。そして多
数派の文書はつきのような点も指摘しているのである。

最大限要求主義風にもっぱら再配分だけに関心を集中する論理と実践から
決別することが大切である。新しい回答を求めることはすべての人々がた
案の質の飛躍を要求する。
そして多数派は政労使間の交渉、協定、コンチェルタツイオーネにも軸足をおいている。この軸足のおきかたに変更のないことは、のちにのべる。

これにたいして Alternativa sindacale の文書（さしあたり 1 だけを検討する）は、階級主義を継続しようとする伝統的な左翼の文書であって、状況がますます悪化しているというお定まりの分析を出発点とする。そして、自分たちが批判の対象となっている制度、システム内部の構成員、主体であるという視点をまったくもたない。つまり、現行の制度、システムに最大限の要求と紛争をもって相対するのみであって、全体としての現行の制度、システムの発展というみとおしをもたないのである。現行制度のゆきづまりの彼方に理想の王国を抱いているのでなければ、この立場を持続することは容易でない。Alternativa sindacale 1 の文書とこれに関する S. トジーニの声明は強調する。

1 労働は固有の中心性を失った。賃金の購買力は世界レベルで減少した。ここ数年の巨大な変化は富と権力の壮大な集中を生みだした。貧しい国民はより貧しくなり、数少ない巨大な工業、経済、金融大集中体が国際舞台、イタリアの舞台を支配し、経済とインフォメーションにたいする公的・集団的なコントロールをうかっている。民主主義にとって明らかな危険である。

2 大会に提出された複数の文書は、幹部グループの分裂をしめすものではなく、スカーラモービレの廃止、93年7月23日のブロトコル、年金合意についてのレフェレンダムなど多くの機会に表明された諸見解と諸立場の表現である。

3 この数年における労働組合のバランスはネガティブであり、路線の深い転換が課題である。Alternativa sindacaleの文書は主として労働組合の要求体系として特徴づけられる。賃金、労働時間、社会国家、雇用の期間についてのオルタナティヴを求めている。政治的枠組みと各政府からの自立を回復すること。賃金をおさえ、社会国家を取り壊し、雇用を攻撃する経済政策に反対する路線を要求する。歴史の本質であり、イタリア社会における当然の役割の本質である階級的で、民主主義的で、自立的で、交渉する役割を回復させる転換が必要となっている。

Cara CGILの文書は、多数派 対 左派批判グループの対立が政党間の対立になっていることへのつけさび批判と拒否である。この立場についてはのち
にふれることにする。

政党としての共産党再建党は、この間、94年の総選挙の下院比例区で6.1％をかくとく（左翼民主党20.3％）、96年の総選挙下院比例区ではこれを8.5％に高めている（左翼民主党21.0％）。①共産党再建党の意気はあがり、CGIL内においても活発化する。対立の激しさについてF.ダーニーニはこうのべている。

「攻撃の無作法さ、用具化は気にしない。しかし分裂の意志があるとおしつけてくるのは憤慨する。」コミュニストにたいする「この数ヶ月間の差別の事実をみとめることはできない。」①

こうした対立の先鋭化のなかで、共産党再建党は、コミュニストのプログラマ・エリア（l’area programmatica dei comunisti）を設立しようという提唱をおこない、96年11月8日の集会でエリアを全国全地域に建設することを確認した。共産主義再建党の親派をあつめる大衆団体の結成である。コミュニスト・エリア設立については、これを支持する発言がRassegnaの誌上に数多く掲載される。Rassegnaの編集部での苛烈な争いの様子が想像される。つきにこれらの発言をみるとしょう。発言は多数派のとっているコンチェルタツイオーネ政策の否定、現行のシステムの否定、最大限の要求、徹底的な闘い、紛争至上主義を反復し、コミュニスト・エリア設立の意義、このエリアが意図している目的と到達点の大きさを強調する。

R.リナルデイはコミュニスト・エリアをつぎのように評価する。

コミュニストのエリアは野心的で義務的なプロジェクトである。社会的衝突が進行中である。政労使の協定、長年にわたる社会的休戦をへて、金属機械部門のはげしき衝突がそれをきりひらいている。

われわれの多くは潮流に反対する闘争の主役であった。われわれの任務はもっと野心的なものであり、大きなものである。コミュニスト潮流の建設に向かえるわれわれへの論争は用具的なように思える。今日、潮流の論理を利用してわれわれに教えを垂れようとしている人に、若干、うんざりしている。

コミュニストのエリアは完全な自立のなかで行動しており、将来もそうである。プロジェクトの内容は、雇用労働世界の深い不満を記録することから出発している。増大する貧しい条件、国際化、富の無制限の拡大というパラダイムの退廃、世界規模での抑制のない競争、フォーティズムを特徴付けて

Vol.3 No.1 (2003) 57
きた投資・生産・雇用・消費の回路が崩壊した。生産性の飛躍、量的な増大に、発展、繁栄、社会的進歩が対応していない。そして、不安定労働の增大。さいきんの協定が提案する哲学も価値もわれわれは共有しない。

労働者の新しい主体主義の建設以外に信頼できるみょうしはない。

92年から今日までの熟健で、協働的な経験は失敗し、改良主義の根拠のなさをしめしている。マーストリヒトのロッパ、財政の健全化、民主化イデオロギー、紛争の抑制は、すべての権利の放棄、労働組合の自立性の否認、労働組合のもっとも深い固有な存在理由の否認、大衆の忍従・受身への傾向をうかがっている。

われわれの提案は、防衛的であると同時に、攻撃的で、発展の新しく・より市民的なモデル価値をもつのである。（55）

つぎはダニーニの主張である。この時期ダニーニは活発にRassegnaに登場している（Nuova Rassegna Sindacaleは96年からRassegnaと名称を変更している）。やや長くなるがダニーニの主張をいく点かにまとめてみよう。

南部の失業率は30％をこえている。この事実はコンチェルタツィオーネによっては闘うことができないことをしめす。税と社会保険の掛け金の逃避が300,000miliardiをこえる。フレキシビリティが豊富に適用されている。協約賃金よりも20-40％低い賃金が存在している。これらはコンチェルタツィオーネ政策の結果である。92年7月の協定と93年7月のブロトコルは企業に、自らの蓄積の欠如と技術的適応の欠如を、賃金のブロックとスカーラモービレのカットをとおして、克服することを可能にした。イタリア企業の技術革新を可能にしたのはこの何年かの労働者の犠牲である。94年、95年に生産のつよい上昇が生じたときに、企業主は恩恵を賃金にまわそうとせず、労働コストの削減と社会国家の再編を主張した。

コンチェルタツィオーネの政策には民主主義が欠如している。労働者のあらかじめの付託なしに締結されたブロトコル、協定があまりに多い。コンチェルタツィオーネの政策は、労働組合の交渉範囲を縮小し、労働組合の役割を、企業の優先策と政府の要請のあいだの、調整主体にひきすぎ、企業の手を自由にしている。正常にもどるべきである。

共産党再建党がコンチェルタツィオーネの欠陥を埋めたことに感謝しなければならない。共産党再建党は失業者と年金生活者というもっとも弱い部分をまもる闘い、労働時間短縮問題を差し迫った目標にする闘いの先頭にたっ
た。共産党再建党とベルテイノッテイの結論を用具的につかって、労働組合の自立性が損害をうけた、共産党再建党はコミュニスト潮流を設立して、分裂を促進する、というキャンペーンがはじまった。96年11月8日の全国集会の選択が何人かに恐怖をおよそさせ、混乱をひきおこしたのは事実である。われわれは、官僚的な怠惰、CGILにおける伝統的な意見の交換方式を破壊した。なされたことのない新しい経験に生命をあたえたことに攻撃がむけられている。コミュニスト・エリアは党の潮流であり、CGILには無縁である。分裂主義的意志を持って労働組合的に代表するものではない。攻撃の無作法さ、用具化は気にしない。しかし分裂の意志ありと押し付けてくるのは懲戒する。われわれの任務の地平は資本主義的生産の現行のモデルよりも広い一般的な熱望である。われわれの選択は潮流のロジック、官僚的権力のロジック、分離の意志と正確に反対の方向にうごいている。長いあいだCGILのミリタニであったが、年金についての協定後、労働組合を離れていた労働者のグループが再加入する意志を表明した。コンチェルタツイオーネの政策は新しい局面に対処するのに効果的ではない。社会的休戦の破棄はイタリアに抗争の局面をひらいた。

97年3月1日のミラノのカーメラ・デル・ラヴォーロのイニシアティブによって、コミュニストのエリアは、その定着という視点からも、また、労働組合的提案能力という視点からも質の飛躍をした。若者達は紛争をみいだし、そこに大きな価値と革新さをもちこんだ。闘いにはいることによって生産の場における風潮の変化を証明した。労働組合のなかの価値と文化の担い手が活動するのは権利である。地域の集会で検証にかけ、実行可能であることが示され、大きな同意をひきおこしつつある。22,000人以上が提案を支持することをきめた。われわれは、尊重されること、承認されること、執行部形成の議案に全面的なかかわることをのぞむ。

エリアに参加するときめた同志たちにたいする、この数ヶ月間の差別的な事実をみとめることはできない。

違う社会モデルの実現が可能だと考えるCGILのミリタニ、掻取、騒乱、階級闘争、連帯というカテゴリーを捨てていない人々、現行の資本主義的生産モデルの克服のために闘うことが可能なと信ずる人々、この数年間の労働組合の政策に幻滅をもった人々、不同意、反対を表明した人々に、われわれの提案を省察するようにすすめる。提案を支持することを決定した人々の圧倒的多数は労働者、作業場の代表である。ネオ・レベラリズムの強力な攻撃、労働組合の再編と周辺化を狙っている人々と闘う共通の戦線を形成し、大衆動
員の新しい局面をひらこう。

エネルギー、電話通信、運輸システムなど経済の戦略的部門における公的存在を擁護し、低賃金、低権利、フレキシビリティ、不安定化に基づくモデルを闘う。（56）

ダニーニの見解を長々と引用したが、資本主義的経済システムの否定、紛争至上主義、公的部門のごとくなど、てっていにして、伝統的な主張である。ここには、70年代の闘争至上主義の内容、それがもたらした結果への省察は皆無である。

ミラノ・カメラ・デル・ラヴォーア副書記長A.ロッキも、コミュニニスト・エリアの重要性を強調する。

われわれコミュニストはCGILの自立の倒壊を批判する。それは資本主義的発展の現行の局面について批判する能力を欠き、労働と生活の条件から出発するプロジェクトを欠いている。コミュニニストのエリアは労働組合組織における単なる複数主義の再提案から生まれたのでなく、もっと根本的な問題を提起するものである。発案しようとする挑戦と提案は高いものであり、政治的左派における諸運命と諸関係、政治的左派・諸運動・労働組合のあいだの関係、である。

労働者の運動と闘いにふたたび強さをあたえる要求戦略の研究、プロジェクト建設、実現の実験室としてCGILを再建する。このことは共産党再建党と左翼民主党政の共通の政治的意志が実現しなければ進行しない。多数派の統治の論理は、さまざまな者のであいだの総合的追求を制限し、少数派にはポストとひきかえに、証言者の機能をあたえるだけである。

CGILにふたつの左派が生きていること、コミュニニスト系のミリターンと、左翼民主党系のミリターンが生きていることを承認すべきである。すべての左派を代表するわけではないが、この2つの共通の意志なしに具体的な事実における選択が具体化されないのである。（57）

だがAlternativaのなかに、コミュニニスト潮流の設立に反対する者もいる。

G.ザッパテッラがそれである。

CGILのコミュニニストcomponentの設立は戦略的誤りである。われわれは数多くの集会でAlternativa sindacaleと釘打った要求体系に意見を求めた。コミュニニストの潮流の設立について意見をもとめなかった。労働組合の練り上げ
と提案は外的な表現になり、代表性は政治投票によることになる。

ここで96年の大会に提出されていたCara CGILの文書にもどうだろう。Cara CGILは、労働組合における政党の潮流にの争いにきびしい態度と拒否をもつグループであることはすでに述べた。

われわれはCGILにおいてさまざまな経験と役割をもち、さまざまな行程をすすんできた。われわれの一部は少数派Essere sindacatoの経験を共有し、他の部分は多数派の立場を共有した。こんにちは、なぜわれわれを結び、この大会文書を提出させるのか？

CGILが完全に自立を回復して転換をとげること、大会が真実であること、つまり、じっさいきな意見の交換にもとづいて革新の探求がなされること、あらかじめ形成されているふたつの隊列の拘束から自由になること、を必要だとみなすのである。多数派と少数派がいさしやから遭遇せず、個々の点についてさえ統一をみていただけないふたつの立場が、下部の大会から全国大会まで形成されていたことになれば、大会の結果は予測されたものになる。われわれは別の大会のあり方を望んだ。大会のさまざまな場で組合員の提出した報告や貢献に価値をあたえ、CGILの最終的な立場をつくっていくべきなのである。

このことは可能ではなかった。政治的componenteの囚われ人である代議員たちは、新しくリニューアルされたふたつの政治路線の間で窒息する危険にある。政策と組織についての決定が、選出された機関とは別の場であるなら、労働組合組織はゆるしがたいほどに縮小する。この大会は得票とポストを計算することに縮小化されて、討論と意見の交換は麻痺し、始まる前に終わってしまう危険がある。

この文書は多数派の文書と少数派の文書を調整する試みではない。われわれの立場は純粋で根本的である。

Cara CGILの立場は、CGILが左翼民主派系と共産党再建党系のあいだの抗争の場になることへの強い異議申立てである。

なお、98年6月にAlternativa sindacaleとコミユニスト・エリアのあいだの即時統一という決定がなされたが、そのとおりにはならなかった。

共産党再建党も前へ進もうとする。
99年3月19-21日リミニで共産党再建党の大会がひらかれ、ベルテイノッテイはCGILにたいししぎょうにきびしい方向を表明する。

ナショナルセンターはもはや要求の主体ではない。労働の視点からコンチェルタツイオーネは失敗した。コンフリクトの管理を労働組合に託するのでは十分でない。労働者を直接結集する新しい形態が設立されつつある。それは目標ごとの委員会である。さまざまな労働組合に配置され、またとどまっているコミュニストは共通のフロントを形成すべきである。CGILにおいては、分裂ではなく、政策的分裂が必要である。労働組合左派に「独立した労働組合的主体の再獲得のための公然たる闘い」を要請する。

ベルテイノッテイは元CGIL全国書記、この時点では共産党再建党のトップである。だがCGIL内のコミュニストも、他の左派グループもこの考えにただず応じるわけにもいかない。むしろベルテイノッテイの極端な考えを抑えようとする。

ダニーニは共産党再建党の大会で、CGILの分裂のないことを決定したことに満足している。政治的・組織的分裂について語る修正も提出されたが、拒否された、とする。

Alternativa sindacaleのリーダー、パッタもベルテイノッテイの方向を肯定しない。

しばらく前までベルテイノッテイはCGILが変わりうるという仮説をを無駄だとしていた。だがCGILが改良しうることが確認された。共産党再建党が分裂をめざさないことも確認された。政策的分裂がオルターナティヴ路線を意味するのなら、それはすでにCGILに存在している。ベルテイノッテイは相変わらず、すでに組織された少数派が存在していることを考慮していない。

とくにベルテイノッテイが提唱した目標ごとの委員会の設立について、ダニーニは、「労働組合におけるコミュニストの組織でないことが条件だ。ある政策選択（たとえば民営化）に反対する闘争委員会であって、ストライキを宣言したり、分裂の要因をつくったりする事はできない」とし、パッタも「ベルテイノッテイは、要求とストライキにおいて労働組合を政党におきかえるという考えを放棄していない」と批判、クレマスキーも「私を困惑させる。
共産党がとるイニシアティブの一部であろうが、私は傾向的なアナルコサノーデイカリストなので、困惑をもっている。CGILの左派は異なる組織の歴史に由来する多くの精神をもっている。統一的で、複数の労働組合左派をめざすことが大切なだけ」(66)と批判的である。

さて、このように共産党再建党系、Alternativa、CaraCGILなどからの批判と攻撃のなかでの左翼民主党系多数派の基本的方向をみておこう。

99年1月におこなわれたRassegnaとのインタビューでS.コッフェラーテイはのべる。

コッフェラーテイ 現在の状況を懸念している。しかし驚いてはいない。開始された多くの紛争は社会協定の価値に論議をよびおこすものではない。クリスマス前夜に署名された合意から出発する。この協定はひじょうに重要である。南部から出発してももっとも弱い現実において雇用をつくりだすことができる経済の成長と発展のプロセスを促進する。雇用の問題は経済の成長なしに解決できない。ヨーロッパ全体の問題でもある。この協定の運営からから生まれた結果からみて、社会的諸勢力と共有した協定にくわわったことはいまでも重要である。

Rassegna 年末の熱狂のあと、金属、旅行、保健、学校、銀行等々ブロックされた多くの紛争を前にして、協定でなにが機能していないかを問い始められる人がいる。

コッフェラーテイ 協定の考え方と内容が論議にかけられることはなかった。協定は経済の再興に貢献する3つのテーマからなる。1、発展のための政策、インフラストラクチュア、訓練、人間の価値、知識を競争のれことにする、2、企業にとって労働コストのダイナミズムへの関与、3、所得政策と交渉モデルの確認。要するに、協定は誠実さをもって、すべていっしょに適用されれば、ポジティブな結果をもたらす複合的な政策の全体なのだ。

Rassegna この間、協約の交渉ではすべてがとまっているか、ほとんどとまっている。

コッフェラーテイ 率直に言って驚かない。心配はしているが。金属の改定は困難である。Federmeccanicaは協定とは異なるテーマを支持してきた。Confindustriaとその会長は、この交渉モデルの再確認に賛成であると表明した。

協定によって政府がおこなった関与は企業の投資を刺激すること、イタリアのシステムが競争力をもち、雇用を創りだす条件にたいしてであって、協
約を改定するのに役立つのではないか。
労働協約の配置を変えなければならないうちは明白である。しかし地区の協約に有利なようにではなく、ヨーロッパの協約に有利なようにである。ヨーロッパ労働協約にかんする立法規定が早急に実現されるよう活動する。全国協約が克服されるだろうと言うのは正しいことである。到達点はヨーロッパの協約である。

Rassegna ダレマは年金をみんな必要をくりかえしのべてきた。
コッフェラーティ イエスだ。多くの人々にとって、福祉は年金におけるだが、必ずしもそうではないのだ。われわれは97年に児童、家族、高齢者についてプローデイ内閣と協定をむすんだ。だが資源はほとんどない。今日、若干の資源が自由になっている。
Rassegna 訓練は協定の理念、強さのひとつである。任務は維持されているのか？
コッフェラーティ 競争のてこのひとつとして訓練が正しく選択された。政策は精緻化され、支出は増大している。

G.カサーディオ CGIL書記もコンチェルツィオーネを中心とする主流派の立場を明確にうごき、共産党再建党の分析に根本から異議をとなえる。

カサーディオ 92年からイタリアが遂行した回復と、現代化のコースのかで、労働者の代表と企業主の代表という大きな社会的諸力がはたした役割について考察する知的正直さをもたなければならない。政治システムのクラシスがもっともするどく、極東のシステムの不安定がもっともドラマティックであった92年から96年に、5つの政府がつづいた。この期間に評価しうる結果をうみだすことができたのは、大きな社会的主体が力と代表性をもち、合意をうみだし、国全体に安定をもたらす能力をもってきたからであった。
Rassegna コンチェルツィオーネの失敗という評価とはまったく逆になか？
カサーディオ 絶対にそのとおりだ。問題がのこされていること、新しい矛盾があることをあくずつもりはない。だが、われわれが展開した役割を過小評価することはできない。コンチェルツィオーネは国のシステムの方向と安定のおそらく唯一の要因である。
Rassegna 共産党再建党は、失業は変わらない、労働者はいっそう貧し

64 経営政策論集
になり、賃金闘争を開始する必要がある、とっている。

カサーディオ 失業は国のもっともドラマチックな問題である。ヨーロッパに共通する問題でもあり、この何年かで前進していない。われわれは新しい道を追求しなければならない。政治主義的、中傷的な批判と主張は、この道をみつけずともに反にたたない。

Rassegna 賃金の問題は？

カサーディオ 他の国より重いリストラは賃金の購買力の低下を他の国より小さくした。これは92年、93年の社会的当事者のあいだの関与による。これが前提である。すべての主体は、賃金と、国の全体的・経済的ダイナミズムとが両立しうる回答をみつければならない。

CGILにおける政策的分裂、さまざまな労働組合におけるコミュニストの行動、労働者のあいだのコミュニストの組織形態の方に、旧い、使い古した合言葉をみる。それらは非現実的で、たんなる合言葉にとどまるだろう。私がもっとも懸念していることは、とうぜん社会的対話の対象である問題にたいして直接介入することが可能だと考えていることである。法律で定められた最低、最高賃金、政治勢力の宣言するストライキ、これらも合言葉でありつつけるだろう。

政治をおこなう者は具体的な分析をおこなう義務をもつ。われわれは抽象とイデオロギーという一種の熱狂に直面している。

左派グループのあいだでの動きもつづいている。

99年7月、ミラノのカーメラ・デル・ラヴォーロで、コミュニストのエリアが、CGIL左派のさまざまな傾向を再接近させるべく組織した会合がもたれている。分裂、非難、不信に事欠かないものの会合の推進者は、雰囲気は過去におけるよりも好ましいとみてている。そして99年10月15-16日、ローマで左派のさまざまな傾向が会合するセミナーが開催され、まとまろうという論議もおこなわれている。この点については他の稿にゆずる。

以上、CGILにおいては、改良主義にてしょうとする左翼民主派系、伝統的なイデオロギーと主張を継続する共産党再建党系、さらに労働者主義にてしつつ伝統的な紛争至上主義を維持しようとするグループのあいだでの対立と抗争がつづいている。左翼民主派系多数派は政労使間協定、プロトコル、コンチェルタツィオーネの路線を歩みつつ、闘いと紛争、社会的緊張をうみだそうとするグループの圧力をうけているのである。
注
(1) 馬場康雄・岡沢憲美『イタリアの経済』早稲田大学出版部、1999．
(2) ゴルバチョフ『ゴルバチョフ回想録／上下』、新潮社、1996．
(3) 河野穂『自動車産業における労使関係—中』、第一書林、2001．
(4) “Nuova Rassegna Sindacale”.92,11,9．‘Parla Ghezzi’．
(5) “Conquiste Del Lavoro”（以下“Conquist”eと略記する）、91,2,3．‘Congresso Pci’．
(6) “Conquiste”,90,3,8．‘Aperto a Bologna il 19 Congresso nazionale del Pci’．
(7) 後 房雄『大転換』、p.131 窓社、1991．
(8) Ibid.p.160．
(9) ジョルジオ・ポッカ、『地獄』千種堅訳、三田出版会、1993．および
C.ファーバ、『イタリア南部・傷ついた風土』、中村浩子訳、現代書館、
1997．
(10) “Conquiste”,94,7,2,3．‘Massimo D’Alema segretario del partito della
Quercia’．
(11) 河野穂、『政労使関プロトコル、Concertazione,統一組合代表』「桜美
林大学産業研究所年報」第21号、2003年3月。
(12) “Nuova Rassegna Sindacale”.88,11,14,G.Cazzola．‘La confederazione
a una svolta dagli esiti ancora imprevedibili’．
88,11,28,P.Schettino．‘vecchie etichette e ambigue aggregazioni’
91,9,30,P.Schettino．‘intanto uniamo I riformisti’
(13) “Conquiste”,89,4,20,P.M.Brandini．‘La CGIL a Chianciano .Il mito della
classe uscito dalla porta entra dalla finestra’．
(14) “Conquiste”,94,6,28．‘Direttivo Cgil.voglia di leader’．
(15) “Conquiste”,93,3,2．‘Chi snatura’．および94,6,28前掲(14)
(16) “Conquiste”,92,11,19．‘D’Antoni sull’assemblea dei quadri Cgil’．
(17) “Conquiste”,93,3,2,前掲(15)
(18) “Conquiste”,94,4,12．‘Il documento con il quale, il direttivo CGIL ha
abbandonato la concordata linea di attesa’．
(19) “Rassegna”.99,1,26．‘intervista a Sergio Cofferati’．
99,4,6．‘Il congresso di Rifondazione, parla Casadio’
(20) “I’Unita”.2003,8,30．‘Chiedo ai Ds di costruire il partito riformista’
(21) 後 房雄、前掲(7),p.160．
(22) 河野穂、「1990年代の労使関係-企業内従業員代表制度の再確立-」，
『桜美林大学産業研究所年報』第20号，2002年3月．
(23) "Nuova Rassegna Sindacale"，92,11,9，'L'unità genaralizzata'．
(24) "Nuova Rassegna Sindacale"，92,11,9，'perché siamo con I consigli'．
(25) "Nuova Rassegna Sindacale"，93,3,15，R.D 'Agostini, 'il vecchio e il nuovo'．
(26) "Conquiste"，92,10,28，'Il Comunicato della Segreteria Cisl'．および
'Dura replica della Cisl alla decisione Cgisl di avvare azioni unilaterali
 di sciopero'．
(27) "Conquiste"，92,11,19，'L'unità sindacale ma senza equivoci'．
92,10,29，'Afforata conferenza stampa Cisl : alla Cgil si chiede un
 chiarimento'．
(28) "Conquiste"，93,2,18，'Cisl e Uil di Milano alla Cgil，Ritorna l'equivoco
O che cos'altro？'．
(29) "Conquiste"，93,2,26，'Perchè è una scelta sbagliata la manifestazione
del 27'．
(30) Ibid
(31) "Conquiste"，88,11,28
(32) "Nuova Rassegna Sindacale" 90,6,4，'Anche in CGIL Democrazia
 Bloccata'．
(33) Ibid．
(34) Ibid．
(35) "Conquiste"，93,7,21，'Venti di Rifondazione nel Porto di Genova'．
(36) "Nuova Rassegna Sindacale" 前掲(32)
(37) Ibid．
(38) "Nuova Rassegna Sindacale"，91,11,11，G. Rispoli ‘Essere minoranza’．
(39) Ibid．
(40) "Nuova Rassegna Sindacale"，97,4,29，I.Pedretti, 'La Cgil sindacato
 conservatore? Siamo ormai alla mistificazione'．
(41) "Nuova Rassegna Sindacale"，91,11,11，G.Rispoli ‘Essere minoranza’．
(42) Ibid．
(43) Ibid，93,11,8，G.pedo, D.Alberti e D.Greco，'Dove ha sbagliato“Essere
 sindacato”．
(44) "Nuova Rassegna Sindacale"，92,1,13-20，M. Sai，'una scelta sbagliata'．
(46) “Conquiste”.
(47) “Conquiste”.
(49) “Conquiste”, 96,7,6-7, L. Tatarelli, ‘CGIL. Si è chiuso ieri a Rimini il 13° Congresso’.
(50) “Rassegna” 前掲 (48), ‘La piena occupazione nella società che cambia. I lavori, il loro riconoscimento sociale’.
(51) Ibid.
(53) 馬場康雄・岡沢憲美 『イタリアの政治』 p.122 早稲田大学出版部、1999.
(54) “Rassegna”, 97,1,14, F. Danini, ‘Ma quale scissione! La verità è che la nostra scelta dà fastidio’.
 97,3,18, F. Danini, ‘La nostra legittima battaglia per il rinnovamento della Cgil’.
(56) “Rassegna”, 96,11,4, F. Danini, ‘Rifondazione e la Cgil’.
 97,1,14, 前掲 (54), 97,3,18, 前掲 (54).
(57) “Rassegna”, 97,6,3, A. Rocchi, ‘Le due sinister devono tornare a dialogare per il bene della Cgil’.
(59) “Rassegna” 前掲 (48), Cara Cgil… (Alle iscritte e agli iscritti per un congresso libero e vero)
(60) “Rassegna” 99,7,27, ‘una proposta dell’ Area programmatica dei comunisti’.
(61) “Rassegna”, 99,4,6, ‘Più che una rottura politica serve una svolta’.
(62) Ibid.
(63) Ibid.
(64) Ibid.
(65) Ibid
(66) Ibid.
(67) “Rassegna”, 99,1,26, ‘intervista a Sergio Cofferati, Se l’Italia scommette sullo sviluppo’.
(68) “Rassegna”, 99,4,6, Il congresso di Rifondazione, parla Casadio, ‘Se manca il contesto’
(69) RassegnaはPirelliを再建した企業家M.トロンケッティの主張についても大きな誌面をさいている。
トロンケッティ急速に変化している世界で、ただちに適応する能力は企業の競争力にとってのキー、雇用の創出の条件である。企業が市場の刺激に自己を適合させるのを可能にする諸要因のなかで、労働要因のフレキシビリティは本質的なものである。需要の変動に、急速かつ経済的に生産を適合させねばならない。イギリス、アイルランド、オランダ、スペインのようにフレキシビリティの大きな形態を導入した国は新しい雇用の創出において大きな結果に到達した。イタリアでも新しいポストがひろくフレキシビリティにむすびついている。しかしイタリアはなお最後尾にある。失業率はもっとも高く、労働力率ももっとも低い。工場内でのフレキシビリティは需要の一時的変動に生産を適合させるために不可欠である。要因は、市場の変化のたびに再交渉することを義務付けないことである。採用と退出におけるフレキシビリティは市場と技術の構造的な変化に対応するために不可欠である。
Rassegna 期限を定めない労働、1日8時間、週5日という伝統に比較してフレキシブルな形でみている。採用、職業訓練契約、臨時労働、有期労働契約、パートタイマー、等々。なぜが必要なのか？
トロンケッティ 正しい方向にすすんでいる。しかしそれらはあまりに片断的、硬直的であり、官僚的拘束のもとにある。労働の新しい形態、労働組織の新しい形態は大いなる機会とはみられず、疑いをもって、非難される傾向にある。
交渉のさいに個々人の選択の自由に大きな余地をのこすこと。われわれの従業員はもはや同質的な大衆ではなく、自己の好みと優先度を確定することができう個人である。
Rassegna 企業のアウトソーシングが拡大している。
トロンケッティ アウトソーシングを解雇のプロセスと混同するこ
とは誤りである。もっとも効率的な主体のあいだでの生産資源の再配置という経済プロセスなのである。
“Rassegna” 99,9,7, ‘intervista a Marco Tronchetti provera, L’Italia sta migliorando ma c’è ancora molto da fare’.
(70) “Rassegna”, 99,7,14, ‘Da Milano parte la scommessa di un nuova sinistra sindacale’.